

港区立郷土歴史館

歴史館だより

特別展「港区と皇室の近代」

明治・大正期にあった幻の洋館 — 芝離宮西洋館 —

辻岡 健志

(宮内庁宮内公文書館)

現在、東京都が管理する都立庭園として親しまれている旧芝離宮恩賜庭園は、かつて宮内省が管理する皇室の離宮でした。前身となる庭園は江戸後期に堀田家、清水徳川家、紀州徳川家へと渡りました。維新後は有栖川宮家の所有となり、明治8(1875)年に宮内省が買い上げ、翌9(1876)年に芝離宮となります。明治・大正期の芝離宮には、いまは現存しない洋館がありました。以下では芝離宮にあった「西洋館」についてご紹介します。

芝離宮の西洋館は来日した外国の皇族や要人の宿泊所として建てられ、皇室によって外国人貴賓を接待する場として用いられました。皇室の外賓接待では、当初浜離宮にあった延遠館という建物が主に用いられましたが、やがて老朽化のため取り壊されると、それに代って用いられたのが芝離宮の西洋館でした。

西洋館は明治24(1891)年、宮内省内匠寮が建設した木造建築です。寄棟造り瓦葺の屋根に棟飾りを付し、ベランダが特徴的な、洋風建築です。完成後

は外国人貴賓の宿泊所・迎賓館としての役割を果たしました。しかし、大正12(1923)年の関東大震災により西洋館も失われてしまい、私たちはもうその姿を目にすることはできません。

宮内庁宮内公文書館が所蔵する「外賓接待写真帳」を見ると、在りし日の芝離宮西洋館の姿を偲ぶことができます。ここには外国人貴賓の接待時に撮影された集合写真等が収録されており、芝離宮の写真も少なくありません。

ここで紹介する1枚の写真はアメリカ陸軍長官タフトが来日した際のもので、記念写真を撮影する一コマです。明治40(1907)年9月30日、芝離宮で撮影されました。背景に提灯で装飾された西洋館の全景が映っている点で、大変貴重な1枚です。芝離宮西洋館は、条約改正等の国家的な課題を抱えるなか、皇室として外国との交流の有り様を模索した重要な場でした。

最後に、本稿で紹介した芝離宮を始めとして、令和2(2020)年度特別展「港区と皇室の近代」では

港区に残る近代皇室の痕跡を宮内庁宮内公文書館の史料を中心にひも解き、近代における港区と皇室の関係を紹介しています。本展示を通じて、皇室と共に歩んできた港区の近代史を知るきっかけとなれば幸いです。

参考文献

- 小杉雄三『旧芝離宮庭園』
東京都公園協会 1981年
小野木重勝『明治洋風宮廷建築』
相模書房 1983年
東京都公文書館編『延遠館の時代 明治ニッポンおもてなし事始め』
東京都公文書館 2016年



芝離宮での記念撮影「外賓接待写真帳(2)」(宮内公文書館蔵)



港区立郷土歴史館

歴史館だより

絵図の読み解き方

一館蔵「増上寺御仏参絵図」の作成目的と年代推定

石田 七奈子

(学芸員)

港 区立郷土歴史館では、絵図と呼ばれる資料を収集・展示しています。広義では絵画も含む言葉ですが、ここでいう絵図とは、土地や建物の平面図で、おおよその位置や関係性が分かるように絵画的に表現した地図の一種です。例えば、現在のイラストマップなども絵図といえるでしょう。多種多様な資料の中でも見た目で感覚的に理解できる絵図は親しみやすい資料の一つです。

絵図の中には、寺院や神社の敷地である境内とその周辺を描いた境内図があります。中世以降、境内を曼荼羅に見立てて信仰を深めるために作成された境内図をはじめ、参詣者への案内や建物の管理など様々な目的で境内図が作成されてきました。目的に応じて図中に描かれる情報は異なり、作成者も描かれた寺院や神社の人びとだけではならず、参詣する側の人びとが境内図を作成することもありました。

当館で所蔵している「増上寺御仏参絵図」も、参詣する側の人びとが作成した境内図です。江戸時代、将軍・徳川家の菩提寺であった増上寺は、幕府にとって重要な場所であり、公的な参詣は欠かせない行事でした。歴代将軍の命日には将軍本人が、また、祥月命日には代理に任命された老中などが参詣しました。その際、江戸城から増上寺の経路と境内では厳重な警備が敷かれ、扉の開閉なども含め、警備担当の武家とその家臣たちが配置されました。



(写真1) 山門(三解脱門)付近「増上寺御仏参絵図」(館蔵)

例えば、現在も残る三解脱門を描いた部分(写真1、図中では山門と書かれている)を見ると、図中に赤

や黒で、丸、三角、四角といった記号が書きこまれています。図の上部には記号の説明(写真2)があり、黒は4月晦日(7代家継・有章院)、6月12日(9代家重・惇信院)、10月14日(6代家宣・文昭院)、赤は正月24日(2代秀忠・台徳院)とそれぞれの将軍の命日が記されており、命日の将軍参詣の際に配置される番人の位置を示していることが分かります。

増上寺には上記以外にも、12代家慶(慎徳院)と14代家茂(昭徳院)の菩提も祀られていましたが、こ

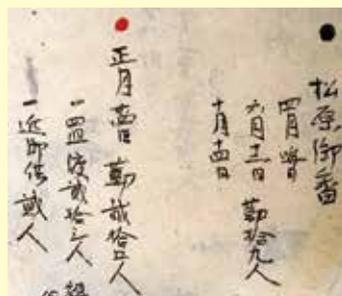


(写真3) 有章院霊廟と文昭院霊廟

には2人の命日は書かれていません。霊廟が描かれた部分(写真3)を見ても、有章院に合祀された惇信院は書き込ま

れていますが、文昭院に合祀された2人は書き込まれていません。このことから、家慶が亡くなる嘉永6(1853)年7月22日以前に作成されたと推定出来ます。その他にも警備についての注記や変更点の書き込みを見ていくと、一番新しいものでは文政13(1830)年6月12日改とあります。この図に作成年は明記されていませんが、文政13年6月12日から嘉永6年7月22日までに絞り込むことが出来ます。

増上寺の境内図は、様々なものが残されていますが、目的や年代を明記していないものもあります。しかし、こうした書き込みや諡(生前の行いに対して死後に贈られる称号、秀忠であれば台徳院)、建物の位置など、書かれている内容から推定できることもあります。絵図を見る際は、ぜひ、じっくり観察して、作成された当時の情報を探し出してみてください。



(写真2) 図の上部の記号説明